

シティズンシップ教育における「スキル」を重視した 世界史の授業実践

—南北問題の歴史的・体験的学習と市民性の視点からの文化史学習—

愛知県立豊田北高等学校

教諭 南里 謙介

はじめに

シティズンシップを発揮するための資質とは「多様な価値観や文化で構成される社会において、個人が自己を守り、自己実現を図るとともに、よりよい社会の実現に寄与するという目的のために、社会の意思決定や運営の過程において、個人としての権利と義務を行使し、多様な関係者と積極的にかかわろうとする資質」と定義されている。さらに、シティズンシップを発揮するための能力として「知識」「意識」「スキル」を挙げている。

また、イギリスのシティズンシップ科では、「犯罪」「人権」など、法教育に関連するユニットを利用し、ディスカッションやグループワークなどを通じて、法的な権利や責任、相互の尊重と理解、対立の公正な解釈などについて学習することが求められている。

さらに、イギリスでは、若者の政治への無関心や投票率の低下に対する不安、地域コミュニティの機能低下や地域レベルの市民活動の機会の減少などの社会の状況を背景に、シティズンシップ教育が注目され、ナショナルカリキュラムにも必修科目として導入されてきている（1999年9月新設、2002年より必修教科化）。

日本においてもイギリスと同様の社会状況がみられる。さらに、日本は、少子高齢化社会の到来により、人口減少の時期を迎えている。（2000年：126,926千人 2001年：127,291千人 2002年：127,435千人 2003年：127,619千人 2004年：127,687千人 2005年：127,768千人 2006年：127,770千人 2007年：127,771千人となり、2008年には127,692千人、2009年には127,528千人と人口は減少しはじめています。また、約20年後の推計では2025年：119,270千人となり、ピーク時から800万人減少している。「国立社会保障・人口問題研究所の将来推計より」）したがって、労働力の確保のために、外国人労働者の受入れの必要性も大きな話題となってきた。以上のことを踏まえると、今後早い段階で、日本にもシティズンシップ教育の導入が、急務となると言えるだろう。さらに、昨今大きな問題となっている格差社会の問題、すなわち社会における階層化や分裂現象を解決するためにも、有効な方策の一つとして、シティズンシップ教育の可能性も検討されるべきである。

次に、学習指導要領の目指す学力とシティズンシップを発揮するために必要な能力との関係について考察してみたい。現行の学習指導要領「世界史B」では、「歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う」、ことが目標とされている。この「自覚」とは今までとは異なる「意識」の芽生えを必要とするものであり、また、「資質」とは、獲得した「知識」と「意識」から得られた「スキル」によって磨かれるものと言えよう。つまり、学習指導要領が目指している学力（能力）とシティズンシップを発揮するために必要な能力、すなわち「知識」「意識」「スキル」の3つに分類される能力はほぼ一致しているものと思われる。

本研究は、既存の評価方法や評価の4観点等を用いて、これらの能力の育成について検証を試みるものである。

<授業実践Ⅰ 南北問題の歴史的・体験的学習>

1 ねらい

シティズンシップ教育では、シティズンシップを発揮するために必要な能力を、「意識」・「知識」・「スキル」の3つのカテゴリーに分けている。その三つが、それぞれ別々の能力ではなく、一体として機能しているのだが、本研究では、特にスキルの習得に重点を置いて研究を進めたい。

なぜなら、世界史Bの授業展開の中では、どちらかという「知識」に偏重した傾向がみられるからだ。もちろん、「意識」・「スキル」の習得には、その歴史の「知識」が必要不可欠であることは疑う余地がない。そのため、「知識」を軽視するわけにはいかない。また、大学入試においても、やはり、「知識」の必要性はその出題傾向からも読み取ることができる。だが、その「知識」が単なる歴史事項の暗記にとどまっていたら、「意識」を変えることはできないだろう。単なる知識ではなく応用可能な生きた「知識」になってこそ、はじめて生徒の「意識」を変えることができる。そして、習得した「知識」を生きた「知識」に変える方法が「スキル」とも考えられる。「スキル」の習得によって、「知識」を活用し、さらに、「意識」をも転換することができるのだ。

したがって、世界史の授業の中で定着した「知識」を生かすために、また、その獲得された「知識」で「意識」を変えるためには、「スキル」を身に付けなければならない。よって、本研究では、「知識」はもちろんであるが、その「スキル」の習得を目指した授業展開を実施し、さらに「意識」を高めるようにしていきたい。

次に、シティズンシップ教育の3つの能力の習得について、より詳細に述べていきたい。

(1) 「知識」(歴史・南北問題の知識)の習得

既存の地理歴史科・公民科の枠内で、シティズンシップ教育の可能性を追究する場合、公民科においては、授業内容のほぼすべてが、シティズンシップ教育の内容に適合していると言える。また、地理においても、民族問題、多文化主義、まちづくりなど、多くの内容で一致している。一方、歴史科(日本史・世界史)では、一見するだけでは、直接的にかかわる分野を見付けにくい。しかし、歴史科の知識重視の基本的なスタイルを変えずに、部分的に授業展開を工夫することで、シティズンシップ教育にも対応させることができるのではないだろうか。

そこで、今回の研究では、国際理解教育で行われているフォトランゲージと貿易ゲームの要素を利用し、講義形式ではなく生徒が主体的に活動できる授業を提示したい。生徒自身が主体的に活動することによって、今まで習得してきた「知識」が再構成されて、生きた「知識」へと発展させていくことができる。生徒同士の交流を増やし、グループ内での意見の交換を通じて、「スキル」の習得に重点を置きながらも、「知識」の獲得をも促す授業展開を模索したい。歴史的な知識・内容を確認しつつ、その過程で「スキル」、「意識」をも同時に身に付けさせたい。

また、今まで個別に理解していた欧米の帝国主義政策や戦後のアジア・アフリカ諸国の独立などの歴史的な事項を、南北問題という視点で、大きな流れでつかませ、膨大な歴史の「知識」の整理と理解を図りたい。さらに、過去の歴史の知識が、現在の南北問題へとつながっていることにも気付かせたい。

(2) 「意識」(異質な他者に対する敬意と寛容、社会に関与し貢献しようとする意識)の習得

フォトランゲージや貿易ゲームを通じて途上国の現状について体験的・経験的に授業に参加することにより、南北問題の原因を考えさせる。状況の異なる国々を知り、意見の異なる友人とゲームの中

で交流することにより、異質な他者に対する敬意と寛容の意識をもたせたい。さらに、南北問題を解決するために、先進国の援助の在り方について再考させ、日本は援助国として何ができるか、また、自分自身が何をすることができるかを考察することを通して、社会に貢献しようとする意識をもたせたい。最終的には、授業を通じ、今までの途上国に対する意識を変化させたい。

(3) 「スキル」(交渉力・ヒアリング力・自分のことを客観的に認識する力)の習得

フォトランゲージと貿易ゲームの2つの方法により、生徒個人で考える場面やグループで考える場面を設定し、意見を交流させる時間を設ける。また、グループ間での交渉と相手の意見を聞く(ヒアリング)機会を多くもたせる。そして、交渉力やヒアリング力を、生徒同士の活動の中で習得できるようにしていきたい。

以上の(1)から(3)の能力は、シティズンシップ教育で育成すべきものとされており、その能力を4観点(「関心・意欲・態度」「知識・理解」「資料活用の技術・表現」「思考・判断」)によって、評価してみたい。シティズンシップ教育に評価の4観点を取り入れることにより、はじめて、その能力の育成を検証することができると思う。

2 研究の方法・工夫

(1) フォトランゲージの利用

国際理解教育の手法であるフォトランゲージを用いることによって、生徒が視覚的・体験的に途上国の現状をイメージできるようにした。また、先進国と途上国の2枚の写真を用いて、それらを比較することはもちろんだが、さらに、それぞれの写真を徹底的に分析させ、たった一枚の写真からでも5W1Hを推測することができることを理解させたい。例えば、ワークシート2の写真では、周囲の草木が完全に枯れている様子から乾季であり、場所は恐らく飢餓の発生率が高いアフリカ地域であり、うずくまっている子は手足の細さから飢えている子供であり、首飾りや腕輪をしているところから女の子であり、死肉を主に食べるハゲワシが少女の死を待っているなど様々なことが分かる。一枚の写真を何気なく見るのではなく、様々な角度から注視することにより非常に多くの情報を得ることができるのだ。同様に、もう一枚の写真から先進国の状況を読み取らせ、2枚の写真の比較から2つの国の現状の格差を実感させたい。

(2) 貿易ゲームの利用

国際理解教育の手法である貿易ゲームを用いることによって、生徒は封筒内の紙やハサミを使って、長方形や円などを作成し、途上国・先進国の現状などを体験的に把握することができるようにした。すべてのグループが先進国と途上国の役割をゲームの中で担うことはできないが、貿易などによる交流でそれぞれの立場を理解することはできる。道具に恵まれ、資源もある国もあれば、両方とも全くない国もある。このゲームでは世界の国々の状況を象徴化してあり、途上国の現状を端的にとらえることができる。

また、ゲームの中で3つの現象(①分度器の価値が3倍になる現象、②長方形が半額になる現象、③シールを貼ると価値が3倍になる現象)を入れた。その現象が実際の国際貿易の場面でどのような意味があるのかを考えさせた。ゲームで象徴化された現象を実際の経済での場面に置き換えることができるか、つまり、学習した知識を活用できるか、獲得した「知識」が生きた「知識」となっているか、についても確認できる。

(3) 地図の活用

既習の欧米の帝国主義政策を世紀ごとの地図に色分けすることにより、宗主国の植民地支配の在り方などを確認し、戦後の独立国と植民地の関係を理解する。さらに、戦後のアジア・アフリカの独立国と現在の途上国との関係も理解し、植民地問題は過去の問題ではなく、現在の南北問題へとつながっていることを視覚的に把握する。

(4) 調べ学習の活用

社会へ貢献する意識を育成するために、体験的に理解した「スキル」「知識」「意識」を実際の行動につなげることができるように、インターネットなどを活用した調べ学習を行わせる。世界で活躍するレポーターとして、途上国の現状レポートを作成し、それを基に、その国の援助のために、高校生として今何ができるかを生徒に考えさせたい。

3 研究の内容

(1) 教科書単元 主題③ これからの世界と日本

(2) 単元の目標

今まで学習してきた歴史事項を現代世界の問題（国際協調、地球との調和、日本の果たすべき役割など）と結び付けて理解していく。また、歴史的な視点から、現代の社会問題の解決策を考察する。そして、「スキル」によって、歴史の「知識」をさらに発展させ、「意識」の転換を図る。

(3) 単元計画

単元名	時間	学習の内容
主題① 国際対立と国際協調	1時間	国際連合による国際協調の可能性と限界について
主題② 科学技術と現代文明	1時間	科学技術の発展と有限な地球との調和について
主題③ これからの世界と日本	3時間	今後の世界的諸問題に対する日本の役割について

(4) 単元の指導計画

	学習内容	学習活動	指導上の留意点
第1時限	1 途上国への援助実態 2 フォトランゲージ 3 基本事項確認	<ul style="list-style-type: none"> 2枚の写真から現在の先進国と途上国との格差を実感する。 UNCTADやDACなどの基本的な用語などの意味を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> データに数字を入れながら、途上国の現状を理解させる。 写真を部分的・全体的に見てその場面を想像させ、考えさせる。 ワークシート1, 2を利用する。
第2時限	1 作業(地図の色塗り) 2 貿易ゲーム ①ルール説明 ②作業開始 ③ゲームの感想	<ul style="list-style-type: none"> 欧米の植民地と現代の発展途上国との関係を把握する。 ルールを守り、ゲームを楽しむ。 現象の意味を考える。 友人と意見を交換し、自分の考えを再構成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 3枚の世界地図を対比して考えさせる。 ルールや現象を正確に理解させる。 準備する物 ハサミ、定規、鉛筆、分度器、コンパス、封筒、シー

・ 本 時	3 まとめ	・ワークシートに記入し、学習内容を 確認する。	ル ・ワークシート3, 4, 6と 配付資料①②を利用する。
第 3 時 限	1 ワークシートの内容 紹介 2 調べ学習 3 まとめ	・意見の共有をさせ、他者の視 点を考える。 ・インターネットなどを利用して、 調べ学習を行う。 ・全体の学習をまとめて、先進 国と途上国との良好な関係を考 える。また、途上国の現状改善に 今できることは何かを考える。	・具体的に調べることができ るように事前にキーワード を提示する。 ・ワークシート5を利用する。

(5) 本時の目標（2時間目の詳細案）

ア 地図の着色により、宗主国と植民地の関係を把握し、また、各世紀の地図を比較して欧米の植民地政策の展開を再確認し、知識を再構成する。さらに、現代の南北問題と結び付けて考察する。

→「知識・理解」の観点で評価する。

イ 貿易ゲームの活動により、グループ間での交渉力、グループ内での意見交換でヒアリング力を身に付ける。さらに、自分のグループがどのような国かを客観的に認識する。

→「思考・判断」と「資料活用の技能・表現」の観点で評価する。

ウ 途上国、中進国、先進国という立場の異なる国々が交流する貿易ゲームの中で、お互いの立場を尊重し、異質な他者に対する敬意と寛容の意識をもたせる。また、意見の異なる友人との交流によっても、同様の意識をもたせる。

→「関心・意欲・態度」の観点で評価する。

(6) 学習指導

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の場面
導 入 10 分	1 作業 (地図の色塗り)	・資料集を参考にして18世紀の植民地分布・19世紀の植民地分布・20世紀の発展途上国分布の3枚の世界地図の色塗りをする。 ・欧米の植民地と現代の発展途上国との関係を把握する。	・3枚の世界地図を対比して考えさせる。 ・今までの世界史の総復習を宗主国と植民地との関係を中心にまとめさせる。	評価1
展 開	2 貿易ゲーム ①ルール説明 ②作業開始 ③現象の説明	・グループ内でお互い意見を交換する。 ・ルールを守り、ゲームに意欲的に参加する。 ・ゲーム中に起こった現象	・ルールで決められた枠の中で積極的に参加させる。	評価2

35分	④感想	<p>を的確に把握して、グループで協力する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゲームを行った感想に加えて、それぞれのグループがどのような国か考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループの稼いだ富の量から、それぞれのグループを考えさせる。 	
まとめ5分	3 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えがどのように変化したかを確認する。また、立場の異なる先進国と途上国との関係や他者について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・南北問題に関する意識の変化に気付かせる。また、先進国と途上国とのよりよい関係について考えさせる。 	評価3

(7) 本時の評価計画

評価の場面	能力	評価の観点	評価規準	評価方法
評価1	<p>【知識】 歴史の知識 南北問題の知識</p>	知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> ・地図に色を塗ることにより、宗主国と植民地との関係を再確認し、さらに、現在の先進国と途上国の南北問題へとつなげて把握することができる。 	ワークシート3
評価2	<p>【スキル】 交渉力 ヒアリング力</p>	資料活用 の技能・表現	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ間のモノのやりとりなどで交渉力を発揮することができる。また、グループ内の様々な意見に耳を傾けることができる。 	ワークシート4 観察
	<p>【スキル】 自分のことを客観的に認識する力</p>	思考・判断	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム中に起こった現象を理解し、貿易を通じて、自分の国がどのような国かを客観的に認識することができる。さらに、単なる知識の理解にとどまらず、象徴化されたゲームの内容を実際の貿易の場面や国の状況などに当てはめて考察することができる。 	
評価3	<p>【意識】 異質な他者への敬意と寛容</p>	関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の南北問題に対する意識の変化を知ることができる。状況の違う各グループの存在（先進国・中進国・途上国の存在）や意見の異なる友人の存在を理解し、 	ワークシート6

			敬意と寛容の意識をもつことが とができる。
--	--	--	--------------------------

4 評価と成果・課題

(1) 評価の具体例

ア 「知識」について

18, 19, 20世紀の3枚の地図を参考にさせて、欧米の植民地支配の在り方（3B政策, 3C政策, アフリカ縦断政策, アフリカ横断政策, イギリスのインド支配, 中国分割, 東南アジアの分割など）を確認し、現在の発展途上国との関係を確認させた。さらに、現在の状況が理解できるように、1人あたりの国民総所得の地図とハンガーマップを利用した。生徒の代表的な回答例を1つ挙げて、成果について考察したい。

【資料1 生徒の回答例①】

「④ ①～③の世界地図から分かることを挙げてみよう」

・1世紀ごとの世界地図と現代の社会の所得を比べてみると
今までの植民地支配を受けていた国は国民1人当りの
総所得が少ない。
・植民地を受けていて低所得の国々はアフリカに集中的に
分布している。

以上のように生徒は記述しており、収奪を受けた旧植民地は低所得国が多く、現在の発展途上国であることを理解できているが、植民地支配を行い、植民地から多くの富を収奪した旧宗主国が、現在、国民所得が高い先進国となっていることについての記述はない。

その他にも以下のような記述があった。

- ・ 以前植民地にされていた国には低所得国が多く、飢餓率が高い。
- ・ 19世紀に植民地化されたアフリカの国々は所得が少ない。
- ・ 植民地を支配していた国は所得が多い。
- ・ 昔、植民地にされていた国のほとんどが発展途上国である。
- ・ 多くの植民地を持っていた欧米は飢餓率が低いが、植民地となっていた国は飢餓率が高い。
- ・ 過去に植民地になった国は現在でも国民所得が低かったり、飢餓に苦しんでいる。

回答例①のような回答が多く、今まで学習してきた欧米の植民地政策と現代の南北問題を関連付けて一応理解することができている。さらに植民地問題という過去の問題と南北問題という現代の問題を結び付けることでより深い「知識」の理解を進めることができたのではないかな。

イ 「スキル」について

【資料2 生徒の回答例②】

「7 このような授業形態についてあなたの思うことを書きなさい」

グループで
さまざまな意見を聞いたり、自分の意見を主張する機会
が多かったので良かった。

以上のように生徒が記述しており、生徒が主体的に活動することにより、グループ内で自分の意見を主張したり、様々な意見を聞いたりすることができたようである。

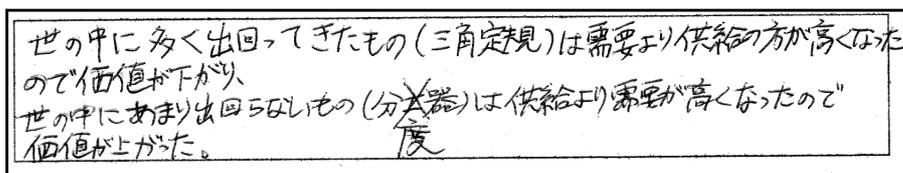
その他にも以下のような記述があった。

- ・ みんなと話し合いながら授業をするので、考える力がついてよいと思った。
- ・ 自分たちがいろいろな立場になって考えることができるので、理解しやすい。
- ・ 班の人と相談できたりして、友人の意見を聞くことができたので、よかったと思う。
- ・ とても集中して授業に参加することができた。他人の意見を聞くことはとても大切だと思いました。
- ・ みんなの考えがよく聞けるし、話合いもたくさんできるから、とてもよかったと思う。
- ・ 様々な資料を見たり、みんなの意見も聞くことができるので、楽しかった。
- ・ ゲームなどによって南北問題を深く理解することができた。グループで行うことで自分以外の新しい意見を聞くことができてよかった。

また、ゲームを観察していて、生徒の活動では立場の違う各グループ間でお互いに足りないモノを融通し合って、貿易することができていた。さらに、グループ内でよく話し合い、他のグループとの交渉係、鉛筆で線を引く係、製品を切る係、作成した製品を世界銀行に持って行く係など役割分担を行い、楽しみながらゲームに参加することができていた。交渉力を大いに発揮して、途上国のグループでありながら、生産額1位となったクラスが5クラスの中で1クラスあった。

【資料3 生徒の回答例③】

「ウ 現象の意味を考えよう」



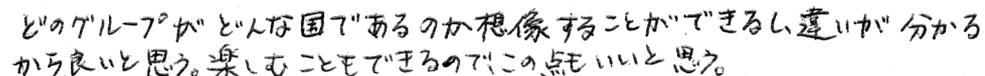
世の中に多く出回ってきたもの(三角定規)は需要より供給の方が高くなったので価値が下がり、世の中にあまり出回らぬもの(分度器)は供給より需要が高くなったので価値が上がった。

以上のように生徒が記述しており、ゲームで起こった現象を実際の経済の現象として、把握することができている。製品の需要と供給関係から価値が決まっていくということを体験的に理解することができた。

しかし、シールの現象（シールを貼ればモノの価値が3倍になるという現象）については、ほとんど理解することができていなかった。経済格差だけでなく、情報のアクセスについても途上国と先進国には格差があり、その格差によって経済格差がさらに、拡大していくことを理解させたかったが、なかなかそこまでは難しかったようである。

【資料4 生徒の回答例④】

「7 このような授業についてあなたの思うことを書きなさい」



どのグループか"どんな国であるのか想像することができると、違いが分かるから良いと思う。楽しむこともできるので、この点も良いと思う。

以上のように生徒が記述しており、自分のグループの状況を他のグループと比較して理解し、自分のグループがどのような国であることを認識することができている。ほとんど全員の生徒が、各自が所属するグループがどのような国であるか（Aグループが先進国で、Bグループが中進国で、Cグループが途上国であること）を客観的に認識することができていた。

その他にも次のような記述もみられた。

- ・ 「ただ問題がある」といわれるよりも、自分たちが実際にその立場になったほうがしっかり理解することができるので、この授業の形態はよいと思う。
- ・ このゲームを通じて南北問題の意味を肌で感じることができた。
- ・ すごく分かりやすかった。実際にゲームをすることによって（私の班は途上国班だったので）、途上国の実態についてよく理解できた。

ウ 「意識」について

アンケートの集計から南北問題に対する意識が変わった生徒は、①大いに変わったと②やや変わった生徒を合わせると76.8%であった。このことは、フォトランゲージや貿易ゲームなどを通じて、体験的・主体的に生徒が授業に参加し、「知識」を再構成し、「スキル」の必要性を認識することができたことを意味している。そして、その結果として、「意識」（考え方）を高めることができたのではないだろうか。

最後に、自由記述の中でも特に、顕著な例を以下に紹介する。

【資料5 生徒の回答例⑤】

「7 このような授業形態についてあなたの思うことを書きなさい」

世界の事態などを意識するとともに、考え方が大きく
 かわるので、いい授業だったと思う。

実際に簡単にだけど自分で経験してやるより分かりやすく
 更に意識も高まるのでとても良いと感じました。

貿易ゲームを通して先進国と途上国の差が身にできて
 いることがわかり、南北問題への意識が少し変わったので、
 こういう体験式の授業も必要だと思う。

自分も^国異質な状態になってみて、変わった考えや現状
 意識がかわったのでいいと思いました。

自分とは異なる国の状況や考え方をゲームを通じて知ることにより、先進国や自分自身の一方的な視点だけからではなく、途上国・友人などの視点からもものごとを考えることができるようになったのではないか。つまり、ものごとをより多面的に複眼的に見ることができるようになったのである。そうすることによって、意識をより高め、考え方を深めることができた。

しかし、それは、あくまでも異質な他者（先進国である日本とは違う途上国や自分と異なる考えをもつ友人）の存在を理解したことに過ぎないだろう。つまり、異質な他者の存在を知るきっかけをもつことができたただけなのだ。シティズンシップにおける他者に対する敬意と寛容の意識をもつには、まだ到底至っていないと言えるのではないだろうか。

(2) 成果と課題

「スキル」の習得に主眼を置いた授業を展開することで、生徒は主体的に楽しく参加することができた。このような授業で今まで蓄積してきた「知識」を体系化し理解を深めることができ、さらに、「意識」をも変えることができたのではないかと。つまり、世界史の帝国主義政策や戦後のアジア・アフリカの独立に関する知識を、現代の南北問題と関連付けて再認識することで、今までの知識をより深く発展させることができたものと思われる。そして、歴史的な背景からも現代の南北問題を考えることができ、日本とは違った状況にある途上国に対する意識を高めることができたと言える。また、貿易ゲームを通じて、主体的に活動する中で、グループ間での交渉力やグループ内でのヒアリング力を身に付けることができた。さらには、自分の属するグループを客観的に認識することもできていた。

しかし、たった2～3時間程度の授業実践だけでは、「スキル」を完全に習得することに無理があり、また、「意識」を大きく変えていくことも難しい。今回の授業ではあくまでもその必要性などを実感する契機をつくったに過ぎないのだ。よって、現在の「知識」重視の授業展開の中で、定期的に「意識」や「スキル」に焦点を当てた授業を実施していく必要がある。そのためには年間の指導計画の中に適切に位置付けていかなければならない（ただし、生徒の感想のなかに、頻繁に実施することへの批判めいた記述がみられるので、現状の大学入試制度に対応させることも忘れてはならないだろう。その点については十分に考慮していかなければならない）。さらに、他教科との連携が必要であり、特に次の学習指導要領でも注目されている総合の授業との連携を考える必要があるだろう。

また、反省として、ワークシート6における事後アンケートの項目が、分かりにくいところがあり、生徒を困惑させた。生徒の目線でもう一度再検討していかなければならない。

以上の結果から、知識を重視した形式をとる世界史の授業においても、シティズンシップを発揮するために必要な3つの能力を育成することは、方法を一部工夫することで十分に可能であると言える。新しく市民科という科目を追加して、教育課程を大きく変更することなく、既存の教育課程で十分に対応していくことができるのではないだろうか。

5 参考資料

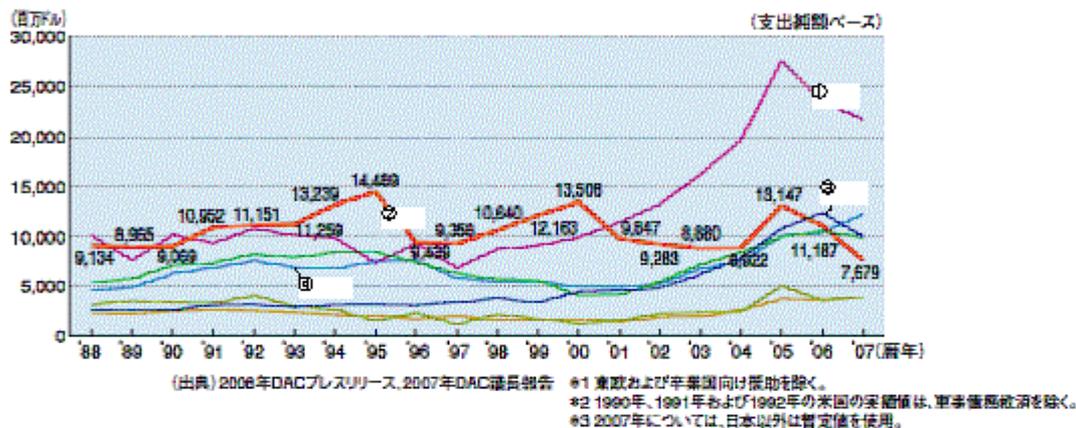
ワークシート 1 (日本の援助と途上国の実態)

以下の現状データを読み、() に適当な数字・語句を入れよ。

①世界における援助国としての日本の地位

日本は 90 年代を通じて 2000 年まで世界第()の援助国としての地位を誇ってきましたが、現在(2007 年実績暫定値)は米、独、仏、英に続く世界第()位です。一般会計の ODA 予算は 1997 年をピークにこの 11 年間で約()割削減され、今は 1980 年代のレベルである 7000 億円程度まで落ち込んでいます。欧米諸国は、2001 年の 9.11 事件などをきっかけに逆に援助を増やす傾向にあり、このままでいけば、日本はさらに順位を落とす可能性もあります。
(外務省ホームページより)

図表 III-5 DAC 主要国の政府開発援助実績の推移(支出純額ベース)



②貧困を示す事実と数字

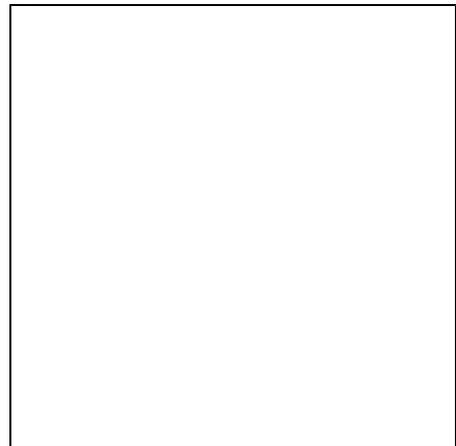
- 全世界で 5 人に 1 人、つまり 12 億人もの男性・女性・子供が現在、極度の貧困状態におかれ、1 日()ドル未満で生活することを余儀なくされています。(※ 1 ドル=100 円で考えよう)
- 読み書きができない成人の数は世界で 8 億 4 千万以上にも達しますが、その 65% は()。
- 先進国には人口 350 人に付き 1 人の割合で医師がいます。しかし、途上国には人口()人当たり 1 人の医師しかいません。
- 世界の資産家上位()人の富を合計すると 60 億ドルに達します。これは後発開発途上国全体の国民所得をすべて合計した額の 2 倍以上に相当します。
- 最も貧しい 20 カ国の状況を改善させるには、()の建設費に相当する 5 億ドルを投じれば十分なのです。
- 重債務国の債務削減には、それぞれ 5 億ドルから 75 億ドルが必要ですが、これはステルス爆撃機()機の建造費にも満たない金額です。
- 極度の貧困は()年までに根絶できます
- 過去()年で、貧困状態にある人々が人口に占める割合は、それまでの()年間とは比べものにならないほど急速に低下しました。
- 1970 年にはわずか 48% だった途上国の成人識字率は、1998 年には 72% まで上昇しました。所得面から見た貧困層は 29% から 24% に低減し、40 歳未満の死亡率は 20% から 14% まで低下しました。
- 過去 20 年にわたり毎年行われた予防接種キャンペーンにより、約()万人の子供の命が救われました。
- 1960 年以来、途上国の乳児死亡率は()以下に減少し、栄養不良児童の割合は 30% 以上低下しました。
(UNDP ホームページ参照)

1 フォトランゲージ

① この写真はどんな場面の写真だろうか？

「ハゲワシと少女」

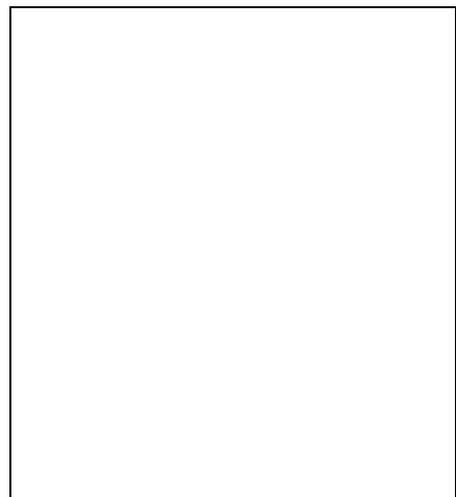
餓死寸前の少女とその少女を狙う
ハゲワシの写真を掲載



② この写真はどんな場面の写真だろうか？

「ホットドッグの早食い競争」

独立記念日に行われるネイサンズの
ホットドッグの早食い競争の写真を
掲載



2 1のデータと2の写真からあなたが感じることを自由に書きなさい。

第 () 学年 () 組 () 番 氏名 ()

ワークシート3 (地図の色塗り)

① 18世紀の地図を見て、欧米の植民地を赤色で塗ってみよう。



② 19世紀の地図を見て、欧米の植民地を赤色で塗ってみよう。



◎ 20世紀の地図を見て，発展途上国を赤色で塗ってみよう。



④①～③の世界地図から分かることを挙げてみよう。

【図1 19世紀後半の植民地分布

出典：「ニューステージ世界史詳覧」1998 浜島書店】



ワークシート4 (貿易ゲーム)

貿易ゲームについて

ア あなたのグループ= () (記入例 A1など)

↓
ゲームを通じてあなたの国はどんな国?

イ 各グループについて

Aグループ (A1~A2) = () 国

Bグループ (B1~B2) = () 国

Cグループ (C1~C2) = () 国

ウ 現象の意味を考えよう。

エ 先進国と途上国の関係についてどう思ったか?何を感じたか?

オ 先進国 (日本) の途上国への援助についてどう思ったか?

第 () 学年 () 組 () 番 氏名 ()

以下の問いに答えよ。

1 南北問題への関心はありますか。①～⑤の選択肢に○をつけなさい。

①大変ある ②ややある ③どちらともいえない ④ややない ⑤全くない

2 南北問題とはどのような問題か説明せよ。

3 南北問題の原因は何か答えよ。

4 南南問題とはどのような問題か説明せよ。

5 発展途上国への援助をおこなうことについてあなたはどのように思うか答えよ。

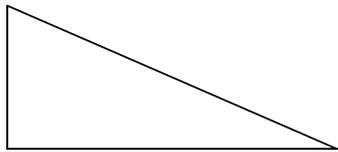
6 南北問題への意識が変わったと思いますか。次の選択肢から1つ選び○をつけよ。

①大いに変わった ②やや変わった ③どちらでもない ④あまり変わってない ⑤全く変わらない

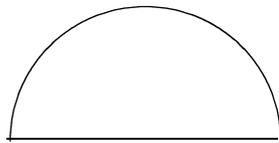
7 このような授業形態についてあなたの思うことを書きなさい。

【配付資料① 貿易ゲーム】

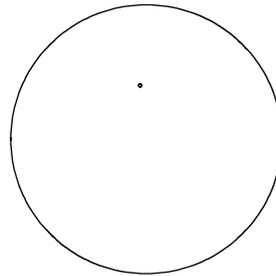
1 製品の見本図



30・60・90度の三角定規
2000円



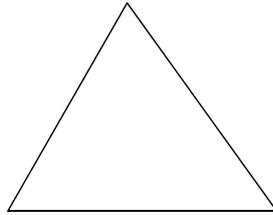
分度器
2000円



直径13cmの円 5000円



縦7cm横10cmの長方形
3000円



1辺7cmの正三角形
1500円

2 ルールの説明

今日はグループに分かれてゲームをします。各グループの目的は、与えられたものを使ってできるだけ多くの富を築くことです。富は製品を生産することによって作られます。製品の形とサイズは封筒の中の見本図に示されたとおりです。

各製品は見本図に示された価値をもっています。製品を世界銀行に持っていくと、品質が点検された上で、その金額がグループの口座に振り込まれます。時間は25分です。

次の点に注意すること。原則的に配られた袋の中のものしか使えません。世界銀行に持っていった製品はすべて正確なサイズで、ハサミを使ってきちんと切られていなければ製品として認められません。

世界銀行は、ゲーム後の各グループの富を記録します。グループが製品を持ってきたら、用紙の該当する欄に製品の金額を記入します。ハサミを使わずに切ったものや、サイズに狂いがあるものは受け取ってはいけません。



【用意した道具一式】



【製品を作成している様子①】

【配付資料② 貿易ゲーム】

3 世界銀行集計表

(1) 生産額集計

		A 1	A 2	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3
三角定規	2 0 0 0 円								
分度器	2 0 0 0 円								
円	5 0 0 0 円								
長方形	3 0 0 0 円								
正三角形	1 5 0 0 円								

(2) 順位

	A 1	A 2	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3
生産額合計								
順位								



【製品を作成している様子②】



【作成された製品の例】

<授業実践Ⅱ 市民性の視点からの文化史学習>

1 ねらい

(1) 「知識」(歴史・文化の知識)の習得

シティズンシップ教育の能力を追究していくと、歴史から大きく離れてしまう危険性があるように思える。加えて、歴史では、膨大な知識量が必要とされる。しかし、シティズンシップ教育の「意識」や「スキル」を身に付ける基礎となるのが「知識」であるので、「知識」を軽視することは許されない。よって、「スキル」の習得に重点を置きながらも、「知識」の獲得をも促す授業展開が必要となる。市民性という視点から、各時代の文化をとらえ直し、文化史の知識を再構成させて、「知識」の定着を図りたい。また、様々な「スキル」を身に付けることにより、「知識」の定着を補完していきたい。

(2) 「意識」(異質な他者に対する敬意と寛容、社会に関与し貢献しようとする意識)の習得

様々な教育方法・理論を用いながら、既存の世界史学習の枠を大きく超えることなく、歴史の知識・内容をまとめてみたい。今回の研究では、グループワークトレーニング(GWT)の手法、クロスワードパズルなどの要素を利用する。ただし、2つの内容を実際に授業の中ですべて実践するとなると、それぞれで1~2時間の時間を要してしまい、結局、既存の世界史の授業計画の中で実施することが困難となる。そこで、GWT及びクロスワードパズルの一部の手法を使って、世界史の授業を考えていきたい。その手法を用いることで、生徒同士の交流をもちつつ、グループ内での意見の交換を通じて、自分とは違う異質な他者に対する敬意と寛容の意識を育成していきたい。

さらに、欧米の文化史(古代から19世紀までの文化)を市民性という視点でとらえ直すことにより、歴史の経過とともに、市民性が発展していることに気付かせたい。そして、20世紀、現代の市民性を考察することにより、社会が求める市民像を考えさせ、社会に貢献しようとする意識をもたせたい。

(3) 「スキル」(プレゼンテーション力・ヒアリング力、ものごとを俯瞰的にとらえ全体を把握する力)の習得

前述の2つの方法により、生徒個人で考える場面とグループで考える場面を設定し、自己の考えをグループ内で表現する(プレゼンテーション)機会と相手の意見を聞く(ヒアリング)機会をつくる。そして、これらの能力を、生徒同士の活動の中で習得できるようにしていきたい。

さらに、市民性という視点で欧米の19世紀までの文化や時代の特徴を概観し、今まで個別に理解していた各時代の文化の一つにつなげて、文化史の大きな流れをつかませたい。そして、ものごとを俯瞰的にとらえ全体を把握する力を身に付けさせたい。

以上(1)から(3)の能力は、シティズンシップ教育で育成すべきものとされている。南北問題の実践同様に、その能力を4観点(「関心・意欲・態度」「知識・理解」「資料活用の技術・表現」「思考・判断」)によって評価していきたい。

2 研究方法・工夫

(1) 方法について

ア グループワークトレーニング(GWT)

グループワークトレーニングの理論と方法は、行動科学に基礎を置くラボラトリー・トレーニングの学習理論とアドラーをはじめとする成長心理学をベースにしている。そのトレーニングの構成は以

下の通りである。シティズンシップ教育の内容にも、GWTに類似したものもあるため、この理論を用いた世界史の授業展開を考えてみたい。

あ	課題とルールの説明	
い	グループ活動 【観察記録】	
う	振り返りシートの記入	
え	振り返りの話し合い	
お	まとめ【フォローアップ】	* 【 】は教師（アドバイザー）の動き

また、このトレーニングのねらいは、次の表のとおりである。自己と他者そしてグループに対して目を向けさせて、グループ内や組織の中の役割などをメンバーとの交流を通じて、間接的に理解を進めるものである。

自分及びメンバーに対して	グループに対して	組織・グループに対して
1. 自分及びメンバーの感情、欲求、 →動機、意図、言動、態度、感情に気付く。	1. グループ・プロセスや集団心 性に気付く。	1. 組織とグループの問題に気 付く。
2. その言動が周囲の人々に及ぼす影響に 気付く。	2. グループの中に自分の位置を 見付け、周囲の人々の期待に応 える。	2. 組織の中にあるグループ間 の問題や、グループの中のサ ブ・グループの問題に気付く。
3. 自分及びメンバーを肯定的に受け入れ る。	3. グループのメンバーとして、 適切で効果的な行動をとる。	3. これらの問題を解決し、組 織とグループの新しい規範、 標準をつくりだす。
4. 自己主張と自己開示を適切に行う。		4. 組織やグループの一員とし て適切に役割を果たす。
5. メンバー全員と対話し、交わりを深め る。		

イ クロスワードパズル

クロスワードパズル（単にクロスワードとも表記される）は、「カギ（ヒント）」と呼ばれる文章を基に、タテヨコに交差したマスに言葉を当てはめて、すべての白マス埋めるパズルである。通常、長方形であり、文字の入る白マスと入らない黒マスから成り、白マスにはカギを配置するために数字などが振ってある。日本語のクロスワードパズルの解にはカタカナを用いることが多い。このように、パズルを解くことで、遊びの要素や柔軟な発想を世界史学習に取り込むことができる。

上記2つの方法では、個人で取り組んだ後、グループで個人の意見を必ず調整するように設定し、異質な他者に対する敬意と寛容、プレゼンテーション力、異なる意見を理解するヒアリング力などの「意識」・「スキル」の育成を目指した。

(2) 文献資料について

文化史をまとめるときに、グループ内で根拠をもって議論できるように、文献資料を利用した。さらに、文献資料を読んだだけでは、なかなか時代や社会状況が分からないものをあえて選び、グループ内で意見が分かれるようにした。並び替えが難しくなるように、かつ市民性をより深く考えるように、内容が非常に抽象的な「ガリバー旅行記」と、時代が古いが民主的な内容の「ペリクレスの戦没者葬送演説」を組み入れた。

(3) 市民性について

文化史の学習は、作品と作者の単純な暗記だけにとどまってしまいう傾向になりがちである。そのため古代から19世紀までの文化を市民性という視点で見直すことにより、その時代の文化的特徴を関連

付けて、理解させることを考えた。つまり、市民性というフィルターを通すことにより、古代から19世紀の文化の一つに束ねて把握させるのである。さらに、20世紀の文化、及び現代の文化も市民性という視点から見つめ直すことで、求められている市民像を考え、市民としてどのように社会に参画するかを考えさせたい。

3 研究内容

(1) 教科書

第12章 欧米における近代国民国家の発展 (山川出版社「改訂版詳説世界史B」)

(2) 本章の計画

単元名	時間	学習の内容
1 ウィーン体制	2時間	・自由主義とナショナリズムを押さえようとするウィーン体制の崩壊の過程を確認する。
2 ヨーロッパの再編	1時間	・クリミア戦争後のイタリア・ドイツの統一によるヨーロッパの新たな国家体制を理解する。
3 アメリカ合衆国の発展	1時間	・フロンティア消滅後の南北戦争とそれ以降のアメリカ工業の躍進を理解する。
4 19世紀欧米の文化 (本単元)	3時間	・ロマン主義から市民社会が成熟したことを、及び科学技術の発達の影響から自然主義が広がり、文化に新しい潮流が見られたことを、それぞれ確認する。

(3) 単元の目標

今まで学習してきた古代から19世紀までの文化を整理して理解していく。また、市民性という視点から、現代の市民のよりよい在り方を考察する。

(4) 単元の指導計画 (3時間)

	学習内容	学習活動	指導上の留意事項
第1時間	1 19世紀の欧米文化	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な事項を文化のロマン主義・自然主義などの傾向・分野ごとの特徴と共に確認する。 ・クロスワードパズルを作成しながら文化史をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・19世紀に欧米で活躍した人物・作品をまとめさせる。
第2時間	1 文献資料の並び替え	<ul style="list-style-type: none"> ・資料(文献資料)の並び替えを行う。 →各資料の問いを通じて既習の文化史の内容を復習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループワークトレーニングの手法を用いて、並び替えを行わせる。
限・本時	2 市民性について	<ul style="list-style-type: none"> ・各資料の中にみられる市民性を確認し、アンダーラインを引く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・市民の定義を基に市民性がみられる箇所を見付けさせる。
	3 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・並べ替え作業や話し合いを通じて感じたことや気付いたことを記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の中で気付いたことをまとめさせる。 ・並べ替え資料①②、ワークシート①を利用する。

第 3 時 限	1 20世紀の市民性	<ul style="list-style-type: none"> ・20世紀の市民性が示されているような資料を探し、教科書・資料集で探す。 ・その後、グループ内でその資料の順位付けを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えをまとめてその後、グループで話し合いをさせる。 ・グループワークトレーニングの手法を用いて順位付けを行わせる。
	2 現代の市民性	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットなどを利用して現代の市民性が示されている資料を探す。 →現代の市民としての在り方を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・オバマ米大統領の演説を提示し、現代の市民性を確認し社会に関与し貢献しようとする意識を身に付けさせる。(資料5参照)

(5) 本時の目標（2時間目の詳細案）

今まで学習してきた古代ギリシア、中世、ルネサンス期、17世紀、18世紀、19世紀の文化と時代・社会の特徴を理解する。そして、その時代の中に見られる市民性を探り、さらに、現代の市民性についても考察する。グループワークトレーニングの手法を用いて、体験型・参加型の授業を展開し、活動を通じてより深く考えさせる授業にしたい。また、生徒の授業への取組や理解度については、ワークシートなどにより確認する。

この授業では、シティズンシップ教育で育成が期待される、次の3つの能力を身に付けることができるようにしていきたい。さらに、それぞれの能力を4観点（「関心・意欲・態度」、「知識・理解」、「思考・判断」、「資料活用の技能・表現」）から評価することを試みたい。以下にその相関をまとめた。

<p>①「知識」（歴史の知識）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ クロスワードパズルの作成・解答により19世紀欧米文化の知識をまとめる。 →「知識・理解」の観点で評価する。
<p>②「スキル」（プレゼンテーション力、ヒアリング力、ものごとを俯瞰的にとらえ全体を把握する力）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ グループワークトレーニングの活動によりそのスキルを身に付ける。 ○ 市民性の視点から文化史をとらえ直し、大きな時代の流れを理解する。 →「思考・判断」と「資料活用の技能・表現」の観点で評価する。
<p>③「意識」（異質な他者に対する敬意と寛容）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ グループワークトレーニングでの話し合いの中で、自分と友人の考え方・主張の違いを知り、その意識をもたせる。 →「関心・意欲・態度」の観点で評価する。

(6) 学習指導

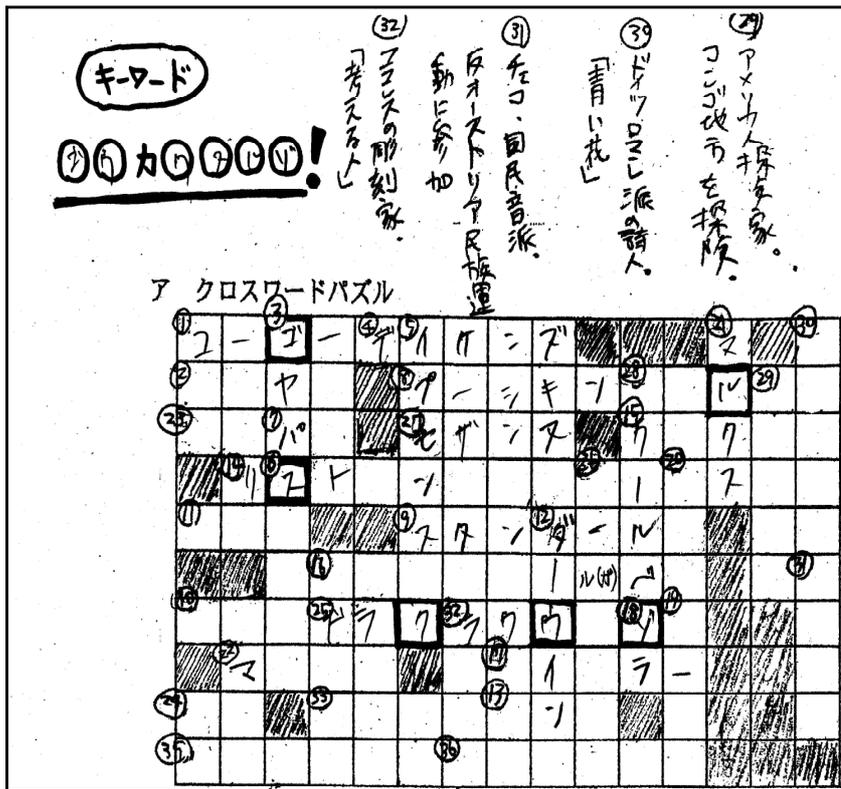
	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の場面
導入 10分	1 前時の復習	・19世紀文化のクロスワードパズルの優秀作品を紹介し、文化史の知識をまとめる。	・19世紀の文化をクロスワードを解くことにより確認させる。	評価1
展開 30分	2 文献資料の並び替え ①文献資料のまとめ ②文化・社会の特徴のまとめ ③市民性の確認	・各文献資料の問いに答えながら、並び替えを行う。 ・文化・時代の特徴を文献資料と結び付ける。 ・市民性の定義を参考にし、文献資料の中にある市民性を探し出す。	・必ず個人から集団へ意見を広げるようにさせる。 ・時代、国、歴史的な背景を考えさせる。 ・グループ内の話合いの中で、自分の意見を比較、検討させる。 ・市民性という視点により中世から19世紀までの文化・時代の内容を整理させ、大きな時代の流れを理解させる。	評価2
まとめ 10分	3 まとめ	・古代から19世紀までの文化の流れや並び替え作業などで感じたことをまとめる。	・授業の中で気付いたことをまとめさせる。	評価3

(7) 本時の評価計画

評価の場面	能力	評価の観点	評価規準	評価方法
評価1	【知識】 歴史・文化	知識・理解	・クロスワードパズルを解くことにより、19世紀の欧米文化を理解し、知識を定着させることができる。	参考資料ア
評価2	【意識】 異質な他者に対する敬意と寛容	関心・意欲・態度	・文献資料の並び替え作業で、相手の意見を尊重することができる。また、根拠を示して、自分の意見を主張することができる。	ワークシート① 観察
評価3	【スキル】 ものごとを俯瞰的にとらえ全体を把握する力	資料活用の技能・表現	・作業の中から文化史の大きな時代の流れや授業の中で気付いた点などをまとめることができる。	ワークシート②

(8) 評価の具体例

ア 知識 【資料1 生徒の回答①】



生徒のクロスワードパズルの作品で優秀なもの（資料1）を利用して、19世紀の欧米文化の復習を行った。この内容すべてを説くことはできない可能性があったので、こちらでキーワードを設けて、問題を解かせ、残りの問題については課題とした。

イ 意識 【資料2 生徒の回答②】

(1) 資料の並び替え

①個人の並び替え

文献資料カード 「 D → C → A → B → F → E 」

その根拠 (F → ガリバ - 旅行記
E → リンカーン大統領 (当時) の演説)

②グループの並び替え

文献資料カード 「 D → A → C → F → B → E 」

ヒント後の変更 「 D → A → C → F → B → E 」

正解 D → C → A → F → B → E

*文化・時代の特徴を参考にする

資料2のように、すべての根拠を挙げて、並び替えができた生徒はいなかったが、全体の取組としては、とてもよい雰囲気であった。また、根拠としてはその資料を決定付ける要因の記述を期待していたが、その資料が何かを答えるにとどまっていた。

一部の男子生徒が少し消極的な行動をとった場面もあったが、ほとんどの生徒は意見を出し合って意欲的に取り組んでいた。相手の意見を聞き、それに対して自分の主張を述べることもできていた。特に印象に残ったやりとりとして、以下のようなものがたつた。

A君「このDの資料は、古代ギリシアの資料であり、一番古いはず」

B君「いや違うぞ。これは民主的な社会体制だから、最も新しいやつだよ」

以上から生徒同士の交流の中から、今まで学習した文化史の「知識」をお互いに出し合うことにより、異なる意見をもつ他者の存在を認め、異質な他者に対する敬意と寛容の意識をもつきっかけを作ることができた。

ウ スキル 【資料3 生徒の回答③】

(5) ふりかえり

① 古代から19世紀までの文化史の流れについて考えたことをまとめよう。

科学技術の発達に伴い、人は自分たちに「出来事」が増えいった。それにより、たゞ神に従うべき、たゞ主に従うべきといった、二種の甘えと苦しい、それが多くの革命を生んだ人だ。——と思った。

② 今日の授業で気付いたこと・考えたこと（並び替え作業や今までの授業との比較など）をまとめよう。

市民について見ていくだけで、時代の流れがあることに驚いた。これからも時代が過ぎていくと、今よりも市民に変化があるのだろうと思った。

ワークシート②の振り返り①では、本来は市民性の発展という視点で、古代から19世紀までの文化をとらえ直すことを意図していた。しかし、資料3に見られるように、この生徒は、市民性の発展ではなく、科学技術の進歩によって、歴史の流れを把握している。こちらの意図したものは別の視点であるが、歴史全体を俯瞰してとらえていると言うことはできるであろう。

振り返り②では、市民性という視点から歴史の流れを把握することに触れるだけにとどまらず、今後の市民の在り方にまで、言及することができている。

・・・我々の国はまだ若い、聖書の言葉には、子供じみたことをやめるときが来たとある。我々の忍耐に富んだ精神を再確認し、よりよい歴史を選び、貴重な才能と、世代から世代へと引き継がれてきた尊い考えを発展させる 때가来た。尊い考えというのは、すべての人は平等で、自由で、あらゆる手段により幸福を追求する機会を与えられるという、神からの約束のことである。

我々の国の偉大さを再確認するとき、我々は、偉大さが決して与えられたものではないことに気付く。それは勝ち取らなければならないのだ。我々の旅は、近道でも安易なものでもなかった。・・・

我々のために、彼らは、わずかな財産をまとめ、新たな生活を求めて大洋を旅した。

我々のために、彼らは、劣悪な条件でせつせと働き、西部に移住し、むち打ちに耐えながら、硬い大地を耕した。我々のために、彼らは、(独立戦争の戦場) コンコードや(南北戦争の) ゲティスバーグ、(第2次大戦の) ノルマンディーや(ベトナム戦争の) ケサンのような場所で戦い、死んだ

しばしば、これらの男女は、我々がよりよい生活を送れるように、手の皮がすりむけるまで、もがき、犠牲になり、働いた。・・・

いま我々に求められているのは、新しい責任の時代に入ることだ。米国民一人一人が自分自身と自国、世界に義務を負うことを認識し、その義務をいやいや引き受けるのではなく喜んで機会をとらえることだ。困難な任務に我々のすべてを与えることこそ、心を満たし、我々の個性を示すのだ。

これが市民の代償であり約束なのだ。これが我々の自信の源なのだ。神が、我々に定かではない運命を形づくるよう命じているのだ。

これが我々の自由と信条の意味なのだ。なぜ、あらゆる人種や信条の男女、子供たちが、この立派なモールの至る所で祝典のため集えるのか。そして、なぜ60年足らず前に地元の食堂で食事することを許されなかったかもしれない父親を持つ男が今、最も神聖な宣誓を行うためにあなた方の前に立つことができるのか。・・・

2009年1月21日2時50分 読売新聞より一部抜粋)

(10) 並び替え資料① (生徒に配布した文献資料)

A

「しかし、これだけが人々に盗みを働かせる唯一の原因ではありません。私の考えるところでは、もう一つ、あなた方イギリス人に特有の原因があります」

「それは何ですか」と枢機卿はたずねました。「それはあなたの国の羊です。羊はとてもおとなしく、とても小食だったということですが、この頃では、(聞くところによると)大食いで乱暴になったそうで、人間さえ食い殺し、畑や家屋や町を荒廃させて人影を絶やしてしまうほどです。・ ・ ・一人のあくなき食欲な者、故郷の疫病のような者が畑を次々に合わせて、何千エーカーもある土地を一つの垣で囲ってしまうために、小作人は追い出されてしまうのです。・ ・ ・かれら(小作人)に残された道は、盗みをやって絞首刑にされるか、・ ・ ・それとも乞食をして歩くか、そのいずれかしかありません。・ ・ ・かれらが、いくら熱心に労働を提供しようとしても、誰もかれらを雇おうとはしないのです。・ ・ ・

問1 上の文章の書名と著者を答えよ。 書名() 著者()

問2 この資料の運動は何か書きなさい。 第()次()運動

B

本書の計画は極めて簡単である。われわれは三つの問題を提出しなければならない。

- 1 第三身分とは何か。すべてである。
- 2 政治制度において今日まで何であったか。無。
- 3 何を要求するか。そこで相当のものになること。

この回答が正しいかどうかは後に明らかになるであろう。・ ・ ・

「第6章 今後なすべきこと」・ ・ ・時代と情勢の成り行きによって起こった革命に対して、目を閉じても無益であろう。この革命はやはり現実なのである。かつて第三身分が農奴であり、貴族身分がすべてであった。今日では、第三身分がすべてであり、貴族身分は空名に過ぎない。しかしこの空名のもとに、新しい許すべからざる貴族制をすべり込ませた。人民が貴族主義者を望まないのは全く正しい。

問1 上の文章の書名と著者を答えよ。 書名() 著者()

問2 当時の旧制度はカタカナで何と呼ばれていたか。()

C

【 】の存在は五つのやり方で証明される。第一の、そしてより明晰な方法は、運動についての議論からくる。つまり、次のことは確実であり、かつ、人間の感覚にとって明白である。世界においては、あるものは、動いている。・ ・ ・もし、他のものによって動かされているものが、それ自身運動しているのであるとすれば、どうしてもそれは、他者によって運動させられている、としなければならない、その他者はまた、第三の他者によって運動させられていることになる。・ ・ ・数珠つなぎになっているこの作動者は、それが第一の最初の作動者によって運動を与えられて、はじめて、運動しうるのである。ちょうど、物体が、手によって作動されてはじめて、運動するように。だから、最後には、最初の作動者にして、かつ他のものによっては動かされないもの、に行き着くことが必然となる。そして、だれでも、この第一のものを、【 】と理解するであろう。

問1 【 】に適切な言葉を漢字1字で答えよ。

問2 この作品は『神学大全』であるが、その著者を答えよ。()

問3 この著者が確立した学問は何か。()学

D

われらの政体は他国の制度を追従するものではない。人の理想を追うのではなく、人をしてわが範に習わしめるものである。その名は、少数者の独占を排し多数者の公平を守ることを旨として、民主政治と呼ばれている。わが国においては、個人間に紛争が生ずれば、法律の定めによってすべての人に平等な発言が認められる・・・。

- 問1 この演説を行なったのは誰か。 ()
- 問2 この後、民主政治の腐敗した形態があらわれるが、その政治を何と呼ぶか。 ()
- 問3 この演説の記録は、批判的な叙述で書かれた『歴史』の中に収められている。この『歴史』の作者は誰か。 ()

E

87年前、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、すべての人は平等につくられているという信条に捧げられた新しい国をこの大陸に打ち建てました。

現在われわれは一大国内戦争のさなかにあります。これによりその祖国が、あるいはまた、このような精神にはぐくまれ、このようにささげられたあらゆる国家が、永続できるか否かの試練を受けているわけであります。われわれはこの戦争の一大激戦地であひ会しています。・・・彼らの死を無駄にしないように、ここにいるわれわれは決意を高く掲げる。神のもとにある、この国に新しい自由を生み出そう。そして、人民の、人民による、人民のための政治を、地上から決して滅びさせない。

- 問1 この演説を行なったのは誰か。 ()
- 問2 この演説が行なわれたのはどこか地名を答えよ。 ()
- 問3 一大国内戦争とは何か。 ()

F

・・・この国（空を飛ぶ島ラピュタ）の人間というのは、始終何か深い思索に熱中していて、何か外からそれぞれの器官に刺激を与えてでもやらなければ、物も言えなければ、他人に耳を傾けることもできないらしい。そこで金に余裕のある人は、こうやってたたき役を一人おく、・・・なるほど彼らは定規や鉛筆や分度器を使ってする紙の上での仕事では大変巧妙である。だが肝心の日常の行動においては、この国の人間くらい無様で、下手で不器用な人間をみたことがない。また只数学と音楽とを除けば、その他のあらゆる問題に関して、およそこれくらい理解の鈍い、でたらめな人間もみたことがない。・・・だが、我が輩の特に関心もし、かつまた甚だ不可解に思ったのは、彼らが情報、政治に対して異常な興味を持っている・・・ヨーロッパの数学者なども多くは同じ傾向を持っていたが、・・・。

- 問1 この文章の作者と作品名を答えよ。 作者 () 作品 ()
- 問2 この作品はヨーロッパで科学技術の最も発展した国を批判したものである。どこの国か答えよ。 ()

(11) 並び替え資料② (生徒に配布した時代・文化の特徴の資料)

あ 中世の文化・時代の特徴	キリスト教を基調とする文化でラテン語による学術交流が行なわれた。キリスト教の時代であり、人々の生活全般に教会の絶大な権威が行き渡っていた。
い 18世紀の文化・時代の特徴	フランスでは旧制度の下で不満を募らせた身分の権利の主張が革命へとつながっていった。合理的な知を重んじて、偏見を批判する立場は科学革命を経て一層大きな潮流となった。それを啓蒙思想と呼び、その考え方はフランス革命にも深い影響を与えることとなった。
う ルネサンス期の文化・時代の特徴	宮廷の保護と中産階級の支持により発達した文化である。都市が発展し、そこから前の時代の文化を引き継ぎながら、人間性の自由・解放を求め、各人の個性を尊重しようとする文化運動があらわれた。この文化運動を支えたのが、ヒューマニズムすなわち、人間主義の思想である。
え 19世紀の文化・時代の特徴	フランス革命とその後の政治・社会の激動は自由への願望と民族の自覚を呼び起こし、アメリカでは市民の利益同志の対立から、北と南の対立が、南北戦争により決定的となった。
お 古代ギリシアの文化・時代の特徴	自由なポリス市民の発露は、合理的精神・完全美の追究・人間中心の文化などであった。ギリシアの文化の母胎は市民が対等に議論することのできたポリスの精神風土にあった。
か 17世紀の文化・時代の特徴	王権による国家の統一が言語の統一をもたらし国民文学が発達した。この時期のイギリスは、近代国家として発展しつつある激動期であった。また、この時代ヨーロッパは、科学の時代と呼ばれるほど、近代的合理主義の思想や学問が本格的に確立された。

(12) ワークシート (授業で使用した資料)

ワークシート①

() 学年 () 組 () 番 氏名 ()

(1) 資料の並び替え

①個人の並び替え

文献資料カード 「 → → → → → 」

その根拠 ()

②グループの並び替え

ヒント後の変更 「 → → → → → 」

*文化・時代の特徴を参考にする

③コンテンツの振り返り

面白かった, 難しかった資料, 印象に残った友人の意見などを書き込もう。

④グループ・プロセスの振り返り

: グループ内の取組の様子, 自分と友人との意見の違いなどをまとめよう。

(2) 市民とは何か

市民＝①市の住民，都市の住民

②国政に関与する地位にある国民。公民。広く公共性の形成に自立的自発的に参加する人々。

③ブルジョアの訳語。市民階級の人。 (新村 出編「広辞苑 第五版」より)

④ブルジョワジーの政治的側面を表すもので，財産と教養を持ち，自律的に行動する人々を指す。現代では，自発的・主体的に政治に参加する人々を市民と呼んでいる。

(政治経済用語集 山川出版より)

⑤中世ヨーロッパ都市の自治に参加する特権をもつ住民に由来する。(大辞林より)

⑥西洋近代史で前代の貴族・僧侶に代わって政治的権力を得た人々。(日本国語大辞典より)

(3) 市民性について

問い 文献資料から市民としての行動が見られる，もしくは市民としての意識などが読み取ることができる部分に下線を引きなさい。

(4) 振り返り

① 古代から19世紀までの文化史の流れについて考えたことをまとめよう。

② 今日の授業で気付いたこと・考えたこと (並び替え作業や今までの授業との比較など) をまとめよう。

4 結果・今後の課題・検証について

(1) 結果について

授業の様子と生徒の主だった記述内容は以下のとおりである。

授業の様子

- ・個人で行った並び替えでは，たった一人だけがすべて正解であった。
- ・グループでの並び替えでは，正答へと近づいており，ヒント後では，2つのグループが正解を導くことができた。
- ・生徒同士の交流があり，いつもと違う雰囲気でも，楽しみながら授業に参加していた。
- ・すべての解答に根拠を挙げることができる生徒はいなかった。

ワークシート①

ア コンテンツの振り返り

- ・ Fの資料は読んだことのある本であり、もう一度読みたい。
- ・ 古代と近代は時代の感覚がつかみやすく、順序を決めやすかった。
- ・ 資料の内容は分かって、年代が分からないものがあった。
- ・ 友人Yの頭のよさが印象に残った。
- ・ 書名とか著者とかが分かったのは、半分くらいだったが、問題にヒントがあって、時代付けは何となく分かった。
- ・ Fが全く分からなかった。

イ グループ・プロセスの振り返り

- ・ 全員が自分の持っている知識を出し合って、話し合いができたので、スムーズに正解を導くことができた。
- ・ 知識がないと何もできないものだと思った。
- ・ みんな積極的ですごかった。
- ・ Bの資料の書名と著者を自分以外のグループ全員が知っていて驚いた。
- ・ 皆の意見をまとめる能力が必要だと思った。
- ・ お互いに思ったことを言うことが必要であった。
- ・ 迷ったところがほとんど同じであったため特に意見の違うところはなかった。
- ・ 様々なことと関連付けて考える力が必要だと思った。

ワークシート②

ア 振り返り (①)

- ・ 資料はその時々の人々の様子などを述べているので、資料を読むことによって、その当時の文化などを知ることができる。
- ・ それぞれの時代の人々の生き方が文化にも反映されていて、それを手掛かりにして時代の特徴を知ることができると分かった。
- ・ 人は常に闘っているように感じた。今はどうなのだろうかと思っただけ思った。
- ・ 科学技術の発達に伴い、人は自分たちができることが増えていった。それにより、ただ神に従っていればよい、といった一種の甘えをなくしていき、それが多くの革命を起こしていったんだと思う。
- ・ 古代から19世紀にかけて、市民の存在が大きく変わっている。歴史の中で、市民は個人としての意識を持ち、時代を平等へと導いていった。人の動きが歴史をつくっていったのだと改めて思った。
- ・ 古代から時代が流れていくごとに市民の権利は確立されているように思えるが、どの時代でも自分たちにもっと権利を与えてほしいと思うのは変わらないものだと思った。
- ・ 歴史を重ねるごとに、市民は自由を獲得してきたけど、自由を手にした今の市民は何を求めるだろう。
- ・ 市民を軸に歴史をとらえると、「権力に属していた時代→フランス革命を期に市民の登場→自由の獲得の時代」と大まかな流れが分かる。

イ 振り返り (②)

- ・今までの授業と異なり、自分の意見を出し合っているのが新鮮であった。
- ・いつか人類が完全な自由を手に入れたら、その後がどうなるのかが気になった。
- ・市民と自由の関係を見れば、時代が分かるということが理解できた。
- ・楽しみながら学ぶことはよいことだと思った。
- ・政治体制だけでなく文化面や市民性から世界史をとらえることで幅が広がると思った。
- ・市民について見ていくだけで時代の流れがあることに驚いた。これからも時代が過ぎていくと、今よりも市民に変化があるのだろうか。
- ・調べたり、資料を見ていたりすると印象に残って記憶に残ると思った。
- ・覚えることじゃなくて考えることが多くていつもと違う世界史のとらえ方ができた。
- ・人は自由を得ようとして歴史が進んでいくことが分かった。
- ・協調性やコミュニケーション能力が育まれてよいと思った。
- ・クラスメイトと顔を合わせながら授業を行うのは新鮮で面白かった。
- ・いろいろな視点からその時代を見ることができた。

(2) 今後の課題について

ア 市民性について

アンダーラインを引かせることは非常に難しかった。市民の定義をワークシートにまとめたが、その市民の内容を理解し、さらに、そこから推測して資料の中で、市民性の有無を確認することは非常に抽象的で分かりにくかった。そのため、どこにアンダーラインを引いてよいか分からず、作業が止まってしまう者がかなりいた。よって、資料の並び替えの解説の中で、市民性の存在については、教師がその箇所を示す程度にとどめた方がよいように思われた。また、正答がはっきりと分からない問題に対して、自分の判断で決定することを躊躇する傾向が本校の生徒にはみられた。この傾向を変えられるように、日頃の授業の中で、正答ばかりを求めるのではなくて、自身の考えを発言させる機会をもつなど、工夫していかなければならないと感じた。

イ クロスワードと並び替えについて

クロスワードや資料の並び替えは非常に楽しそうにやっていたが、振り返りの記入となると、一部の男子のグループは素直に思ったことを書き込むことができなかつたように感じた。このことについては、シティズンシップ教育自体の問題点としても指摘されているので、今後検討していきたい。

ウ 実施時期について

3年生の後半で実施したため、なぜこの時期にという違和感を感じる生徒もいた。もう少し、時期を考えて実施していきたい。

(3) 検証について

以上の授業実践を基に、シティズンシップ教育で求められる能力の育成について、次のように検証した。

ア 「知識」(歴史の知識)

- クロスワードパズルの作成・解答により19世紀欧米文化の知識をまとめる。

ただ単に授業を聞き知識を暗記するだけでなく、教科書や資料集などを参考にして生徒自らが問題及び解答を作成した。また、クロスワードパズルを解く際に、生徒同士が話し合い、お互いに刺激し合うことで、知識の定着度も高くなっていると考えられる。さらに、時代を貫いて、文化を振り返ったた

め、それぞれの時代の特徴を理解し、知識を整理することができたように思われる。

イ 「スキル」(プレゼンテーション力、ヒアリング力、ものごとを俯瞰的にとらえ全体を把握する力)

- グループワークトレーニングの活動によりそのスキルを身に付ける。
- 市民性の視点から文化史をとらえ直し、大きな時代の流れを理解する。

グループ内で自分の考えを話し、友人(他者)の意見を聞くことにより、お互いの考えの違いを理解するきっかけとなり、また、刺激し合うことができたようである。古代から19世紀までの特徴を市民性の視点から俯瞰的にとらえることができた生徒もいた。しかし、たった一度の体験だけでは、そのスキル自体を身に付けるところまでは到達できていないように思われる。一度だけでなく、数度時代を見る視点を紹介してはじめてスキルを習得することができるのではないだろうか。

ウ 「意識」(異質な他者に対する敬意と寛容)

- グループワークトレーニングでの話合いの中で、自分と友人の考え方・主張の違いを知り、その意識を持たせる。

グループ内の話合い、友人の話を聞くことはほとんどの生徒ができているが、異質な他者に対する敬意と寛容という意識までには、到達できていないように思われる。この意識をもたせるには、日頃の授業の中で友人の意見や考えを聞く場面を意識的に多く設定する必要がある。

以上から、世界史の授業においても、シティズンシップ教育で求められる能力を育成することは十分可能であることが分かった。ただし、一回限りの単発的な授業でなく、定期的に授業内でその能力の習得を図らなければならない。すなわち、年間授業計画の中で、従来の知識重視の授業を中心としながらも、シティズンシップ教育の能力育成をも目指す授業形態を組み込む必要があると言える。

おわりに

今回の研究では、世界史Bにおけるシティズンシップ教育の実践例として、スキルの習得に焦点を絞り、指導者の一方的な講義ではなく、生徒の主体的活動を重視した取組を試みた。特に授業内では、教師の話す時間よりも生徒の話す時間が長くなるように心掛けた。研究実践Ⅰでは、「南北問題」をテーマとして扱い、フォトランゲージ、貿易ゲーム、調べ学習などの手法を盛り込んだ。研究実践Ⅱではテーマとして「19世紀の欧米文化」を扱い、その中で、文化と時代・社会の特徴の関連に注目させた。そして、古代から19世紀までの文化の知識・内容を再び整理できるように配慮した。このやり方は、文献資料だけでなく、絵画・写真などでも応用ができると思われる。また、クロスワードパズル、グループワークトレーニングなどの手法を用いた。

2つの研究実践では、生徒が体験的に、主体的に、学ぶことができるように心掛けた。特に「スキル」については、講義による一方的な伝達ではなく、生徒の活動を通じた習得を意識した。

今後は、世界史の他のテーマ(古代ギリシアの直接民主政、ソクラテスの裁判、古代ローマの万民法、古代中国の諸子百家、アラブ帝国とイスラーム帝国の比較、宗教改革、征服王朝の元と清の統治、パリ講和会議、イギリスの宥和政策、ヒトラーの大衆扇動など)において、シティズンシップ教育を実施することの可能性を検討していきたい。そして、年間の計画に盛り込むことによって、シティズンシップを発揮するための能力である「スキル」「意識」の定着が可能となるだろう。また、教育・ゲームの理論や手法を用いた実践例も共に考えていきたい。

地歴公民科だけでなく、現在注目されている総合の授業との連携も考えて、継続的なカリキュラム

をも考察してみたい。さらに、評価の4観点とシティズンシップ教育の目指す能力、OECDのキーコンピテンシーなどとの関連性についても、検討を進めていきたい。

【参考文献】

- 経済産業省 『シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書』 2006年
法教育研究会 『はじめての法教育－我が国における法教育の普及・発展を目指して』 2005年
清田夏代 『現代イギリスの教育行政改革』 2005年 勁草書房
江口勇次 『世界の法教育』 2003年 現代人文社
若生 剛 「イングランドにおけるシティズンシップ科の設置と法教育」(『世界の法教育』)
宮澤 喬 『ヨーロッパ市民の誕生』 2004年 岩波新書
小玉重夫 『シティズンシップの教育思想』 2003年 白澤社
木村 浩 『イギリスの教育課程改革』 2006年 東信堂
ジェフ・ウィットイー 『教育改革の社会学』 2004年 東京大学出版
全国法教育ネットワーク 『法教育の可能性』 2003年 現代社会人文社
磯山恭子 「アメリカにおける法教育の到達点から学ぶ」(『法教育の可能性』)
阿部菜穂子 『イギリス「教育改革」の教訓』 2007年 岩波ブックレット
荻谷剛彦 『教育改革の幻想』 2002年 ちくま新書
國分康孝ら 『エンカウンターとは何か』 2001年 図書文化
坂野公信ら 『新グループワーク・トレーニング』 1995年 平文社
愛知総合教育センター研究紀要 第95集
文部科学省 『新学習指導要領』 1999年
平凡社 『西洋史料集成』 1990年 平凡社
開発教育教材制作委員会 『開発教育・国際理解教育ハンドブック』 2001年 国際協力推進委員会
萬谷 迪 『世界開発と南北問題』 2004年 八朔社
藤原章生 『絵はがきにされた少年』 2005年 集英社